

収束の見えないコロナ禍で 飲食店は存亡の危機に置かれている

空が澄みきった秋になっても、気分が晴れない日々が続く。コロナ禍の見通しの効かない状況が、いつまで続くものやら憂鬱になってしまふのだ。

この前、にかほ市の馴染みの寿司屋さんを訪れた時、コロナ禍が飲食店に与える影響の大きさを認識することになった。二十年前も前になるが、居酒屋の撮影取材でお世話になり、その時の主人と店の印象がとても心地良く、それからは寿司職人としての「こだわり」とセンスの良い「うで」に惹かれ、通っている。

取材した当時は、寿司屋を開店して間もないというのに、洗練された「ものごし」は何処で身に着けたものやら、伺うと納得であった。いきさつは、東京・世田谷の有

名な寿司屋さんに弟子入りして、五年という年季を三年で終え、のれん分けしてもらったというのだ。

コロナ禍の影響は深刻だと思ったのは、私たちが店に入つて間もなく正午という時刻なのに、なかなかお客さんが現れないことであつた。

料理を運んでくれる女将さんの説明では、コロナ対策としてお客さんは予約の人に限定しているが、その他は持ち帰りと配達で営業しているというのだ。国や自治体からの補助は、売り上げの半分以下の条件でしか申請できないので「無理」と語った。一時間ほどで、ゆつくりと寂しい空間の美味しい食事を終えたが、その間、お客さんは無かつたのだ。

規制、自粛で苦勞を強いられている飲食店の多くが、存亡の危機にある。酒を伴う飲食が、危険視されている。飲んでも、食べても、「しゃべるな」だ。小学生の孫から「給食を黙って食べる」と聞いたときは、可哀想で仕方なかつた。

コロナウイルスは日常を変えていく。幸福とは、豊かな社会とは何なのか、問い続けている。年が変わって春になったら、コロナ禍は収束しているだろうか。その頃には、いつもの日常を取り戻したいと望みながら、冬へ向かう覚悟を決める。

新緑の山河を思い浮かべると、安らかな心境になっていく。新緑に立ち尽くす天然杉は、幾つの時代を過ごしてきたのだろうか。憂鬱な時代は、もうすぐ終わる。